

## 日本台湾学会の近況

やまだあつし

はじめに

- I 第10回研究大会
- II 部会・例会活動
- III 学会報
- IV ニュースレター  
おわりに

### はじめに

日本台湾学会は、日本における台湾研究者が結集して成立した、分野横断・学際的な学会である。1998年5月30日に創立大会を開催し、今年で10周年を迎えた。会員数は台湾在住会員を含め400人を超える。学会の活動は、年1回の研究大会、関東・関西・台北の各地で開催される部会・例会、年1回刊行の『日本台湾学会報』（以下、学会報）、「戦後日本における台湾関係文献目録」の編集などが主なものである。

これらの活動は、会員に対しては学会報、『日本台湾学会ニュースレター』（以下、NL）、ホームページ (<http://www.soc.nii.ac.jp/jats/> 以下、HP)、そして郵便による案内によって随時紹介されているが、会外では学会報を東方書店で発売しているのを除くと、HPで紹介される程度である。

今回は『アジア経済』の「学界展望」の場を借りて、HPを除く日本台湾学会のこの1年間

の活動を紹介したいと思う。

### I 第10回研究大会

日本台湾学会は、成立して間がなく会員数も少ないということもあり、研究大会を1日（午前と午後）だけ開催してきた。第1回から第3回と第6回大会が東京大学本郷キャンパス、第4回大会が名古屋国際会議場、第5回大会が関西大学、第7回大会が天理大学、第8回大会が一橋大学、第9回大会がアジア経済研究所での開催であった。

しかしながら第10回は記念大会として、東京大学駒場キャンパスで2008年5月31日（午後）と6月1日（午前・午後）という2日間の日程で行った。1日目は「台湾研究この10年、これからの10年」と題するシンポジウム、および政治・経済・社会・文学・歴史の各分野からのパネルディスカッション、そして李遠哲博士（台湾の中央研究院前院長、ノーベル化学賞受賞者）による記念講演「私の学問、私の人生」と懇親会であった。2日目は分科会と総会である。参加者は延べ227人であった。

日本台湾学会の特色として、報告分野が多様なことがある。第10回大会の2日目は24報告が行われたのに過ぎなかったが、題名を列挙すれば、

第1分科会 「文学から見た台湾の記憶／記憶  
の台湾——1930年代を中心に」

Robert Tierney (Univ. of Illinois, Urbana-Campaign) “Narrating the Musha Incident”

呉亦昕 (筑波大学大学院) 「彼らの『東京』——1930年代台湾新文学のなかの東京」

李文茹 (台湾・慈濟大学) 「集团的記憶の連続と断絶—戦後の霧社事件の関連作品をめぐって」

呉佩珍 (台湾・東呉大学) 「なぜ、今、女性作家は三〇年代を書くのか?——日台女性作家による殖民地台湾の記憶の再編制」

第2分科会 「『ポスト1958』の中台関係——  
攻撃の「挫折」か「回避」か?」

石川誠人 (立教大学大学院) 「1962年国府の『大陸反攻』計画の立案とその挫折——主に対米関係の視点から」

福田 円 (東海大学) 「中国の台湾政策 (1962年)——福建省軍事動員と『危機』の回避」

第3分科会 「台湾企業組織の発展と人的ネットワーク——計量分析とフィールドワークからのアプローチ」

李宗栄 (中央研究院社会学研究所) 「台湾企業グループ間の親族ネットワーク構造」

田嶋真弓 (台湾・花蓮教育大学) 「ネットワーク構造と知識導入メカニズム——台湾IC産業とTFT-LCD産業の比較を中心に」

第4分科会 「殖民地台湾の新旧文学活動に潜  
在する外来的要素」

許時嘉 (名古屋大学大学院) 「殖民地台湾の漢詩活動と内地日本の漢詩ブームとの接点について」

劉海燕 (名古屋大学大学院) 「台湾新文学における中国新文学の影響——『台湾民報』

(1923~32)における中国新文学作品の分析を中心として」

第5分科会 「台湾2008年選挙の分析」

小笠原欣幸 (東京外国語大学) 「投票行動の变化——2004年選挙との比較」

岸川毅 (上智大学) 「2008年選挙後——立法院の役割と政策過程の変容」

第6分科会 「自由論題報告Ⅰ」

呉玲青 (東京大学大学院) 「米価変動から見た十九世紀前半の『台運』」

紀旭峰 (早稲田大学大学院) 「植村正久と台湾——日本キリスト者の殖民地認識をめぐって」

第7分科会 「自由論題報告Ⅱ」

高橋一聡 (一橋大学大学院) 「1950年代国民党の『共匪』認識と反共文芸作戦」

松崎寛子 (東京大学大学院) 「台湾高校国文教科書における台湾文学」

第8分科会 「自由論題報告Ⅲ」

金戸幸子 (東京大学大学院) 「1930年代以降の台湾における植民地的近代と女性の職業の拡大——八重山女性の殖民地台湾への越境を促したプル要因との関連を中心として——」

磯田一雄 (大阪経済法科大学) 「皇民化期台湾における日本語短詩文芸——戦前期台湾短歌・俳句と戦後台湾歌壇・俳壇のミッシング・リンクを求めて——」

第9分科会 「自由論題報告Ⅳ」

荒井久夫 (専修大学大学院) 「台湾産業のスピーン・オフ形態の創業事例——IT, 機械・金属産業を中心として——」

寺尾忠能 (アジア経済研究所) 「台湾の船舶解体業の盛衰と資源リサイクル産業」

第10分科会 「自由論題報告Ⅴ」

倉本知明（立命館大学大学院）「身体的記憶から都市の廃墟へ——朱天心『ハンガリー水』における眷村表象を中心に——」

西端彩（お茶の水女子大学大学院）「モダニズムvs郷土文学？——黄春明のモダニズム実践を通して——」

第11分科会（実行委員会企画） 「涂照彦・劉進慶の仕事を読み直す」

涂照彦（日本学術振興会）「涂照彦『日本帝国主義下の台湾』再読」

北波道子（関西大学）「台湾の経済発展と『官民二重構造』」

のとおりである。分科会方式を採用し、特に自由論題でない分科会は企画責任者（報告者と違い、多くがいわゆる有職者である）が用意した企画に基づいて、報告とコメントを組み合わせて深く議論する方式をとっている。自由論題についても、コメンテータを置き、十分な報告と質疑を用意する体制である。第1・4・7・10分科会は文学、第2・5分科会は政治、第3・9・11分科会は経済、第6分科会は歴史、第8分科会は歴史と文学の混合というべきであろう。今回はたまたまなかったが、人類学や言語学の報告もある。

企画責任者が組織した分科会について概要を紹介しよう。第1分科会は、文学という想像力のフィルターを通して、植民地台湾の記憶はどのように再編成されるのかを1930年代をキーワードにしながら問題化したものである。戦前、戦後についてそれぞれ事例研究を行っている。

第2分科会は、1950年代以降の中台の危機状況をどう考えるかというものである。金門・馬祖への武力攻撃が如実に現れた1950年代以降、

結果的には軍事的な危機を迎えることなく推移しているが、それを攻撃の「挫折」とみるのか「回避」とみるのかで、国際政治の意味は大きく異なってくる。報告に従えば、中国からみれば攻撃の「回避」であって、台湾からみれば少なくともアメリカの支持を取り付けられなかった点で「挫折」であったと言える。

第3分科会は、台湾の社会や文化の特性が企業組織のオペレーションに与える影響について、社会ネットワーク理論を軸に、計量分析とフィールドワークという対照的な研究方法を用いた報告により検討したものである。

第4分科会は、明治期台湾で漢詩が唱和されたことを日本人の漢学観の変容という内面的角度から捉え直そうとする報告と、1920年代台湾での中国白話（口語）文運動の受容についての報告により、植民地台湾の新旧文学活動に潜在する外来的要素を検討したものである。

第5分科会は、標準偏差を用いて2008年選挙の投票結果を分析し、2004年選挙と比較しながらその性質を明らかにするとともに今後の国会審議について展望したものであった。

第11分科会は、近年相次いでお亡くなりになった涂照彦・劉進慶の両先生の著作、特に1975年に東京大学出版会から相次いで刊行された涂照彦『日本帝国主義下の台湾』と劉進慶『戦後台湾経済分析』という、台湾研究において「古典」ともいえるべき位置を占めている著作から私たちは何を学び、何を批判すべきなのかを問うものである。

このような多様な報告が並ぶので、全部の報告を理解できる会員はいないかも知れない。私も文学の報告が解るかと言われれば自信はない。とはいえ解らないなりに耳学問をすることで、

自分の研究対象から周辺領域に向かって知見を拡大できる。興味ある分科会が重なって聞けない場合もあるが、それは懇親会で質問すればよい。分野横断的な学会にとって、懇親会とは異分野交流と新たな研究ネットワーク構築の場である。

今回の第11回研究大会は1日開催に戻り、2009年6月6日に日本大学文理学部で開催の予定である。

## II 部会・例会活動

### 1. 関東の定例研究会

多くの学会で、大会以外に例会がある。開催頻度はさまざまだが、研究大会の予行演習の場、または学会報への投稿準備の場として活用されている。日本台湾学会も例外ではない。関東・関西・台北の各地域毎に例会が組織されている。

関東部会の例会は、定例研究会と称し不定期開催である。ただし文学関係は別に場があるのか、定例研究会（歴史・政治・経済部会）と称している。あいにく第10回大会もあって中心メンバーが多忙だったためか、2008年7月11日の第46回定例研究会の前は、07年10月22日の第45回定例研究会まで開いている。その前は、2007年7月31日の第44回定例研究会であった。

第46回定例研究会は、早稲田大学22号館で行われ、黄偉修（早稲田大学大学院）が「李登輝総統における大陸政策の組織過程——辜汪会見を事例として」を、森田健嗣（東京大学大学院）が「戦後台湾山地における『国語教育』の展開（1945-1954）」を報告した。2人とも本稿の他の個所でも名前が出てくる活発な院生である。

第45回定例研究会は、明治大学駿河台キャン

パスリバティタワーで行われ、福田円（慶応義塾大学大学院）が「中国の台湾政策（1962年）——福建省軍事動員の要因と「危機」の回避——」について報告した。福田氏の報告は、第10回大会での同氏の報告に活かされた。

第44回定例研究会は、上智大学2号館で行われ、羽田哲（海洋政策研究財団）報告題目が「日台間の漁業の問題点」を、黄偉修が「『戒急用忍』政策の決定過程——決定パターンの検討」を報告した。黄氏の報告は後述の学会報掲載に繋がった。

### 2. 関西部会の研究大会

関西は、大阪府吹田市の関西大学を拠点とする台湾史研究会がある（[http://www.geocities.jp/taiwan\\_studies/](http://www.geocities.jp/taiwan_studies/)）。発足は日本台湾学会よりも古く、今年で創立30周年を迎える。会員は200人弱、会誌の『現代台湾研究』は本稿作成時に第34号を編集中であった。

故・石田浩日本台湾学会第2代理事長や私やまだあつしを含め、メンバー的にも日本台湾学会と重複することもあり、関西での例会は台湾史研究会に任せ、関西部会は年1回の研究大会を台湾史研究会と共催で開催している。2008年度は、第6回大会を12月6日に京都光華女子大学で開催予定である。なお台湾史研究会は、現代台湾研究学術討論会という独自の大会を年1回開催している。第12回となる2008年度は9月7日に「台湾原住民の現在を考える」というシンポジウムを中心としての開催であった。

関西部会の集まりは、大会と名乗っているだけあって、分科会方式こそ採用しないものの、1回に5報告程度を行う密度の濃いものとなっている。去年の12月8日に近畿大学で開催された第5回大会は、

林冠汝（名城大学大学院）「台湾格付け制度の  
発展と社債市場の発展との関係」

圖左篤樹（関西大学大学院）「アメリカの台湾  
に対する経済援助の再開をめぐる」

森田健嗣（東京大学大学院）「戦後初期台湾に  
おける「国語教育」の移入 特に「台湾語」  
の位置を中心として」

小野憲一（龍谷大学大学院）「台湾の高級中等  
教育における「職業観・勤労観」に関する  
一考察——アンケート調査結果から——」

陳瑞紅（奈良女子大学大学院）「二人称代名詞  
の使用と丁寧さを表わす構文との関連につ  
いて——台湾国語と普通話との比較から——」

という内容であった。こちらも日台の若手院生  
たちによる経済・政治・教育・言語など多様な  
分野の報告が一堂に集う、日本台湾学会の学際  
性をみることができる。参加人数は30人余り  
であった。

### 3. 台北定例研究会

学会会員は研究地域である台湾にも居住して  
いる。多くは台湾で職を得ている、もしくは留  
学・長期研修中の日本人および日本留学から戻  
った台湾人であるが、台湾でずっと研究してい  
る会員もいる。

また大学の休みともなれば、多くの会員が日  
本から台湾を訪れる。会員のなかには山地で調  
査三昧の方もいるが、大半は台北に集まる。台  
湾研究以外の目的でも、例えば中国大陸時代の  
中華民国を研究するにも台北が好都合であるこ  
とを含め、夏の台北では中央研究院で多様な日  
本人と出会うことができる。

そのような会員密度を背景に、台湾研究にた  
ずさわる人々がそれぞれの領域をこえて集まり、

議論や交流を深めるために開催されているのが、  
台北定例研究会である。中心となる会員の入れ  
替わりで繁閑があり、1カ月毎に開催されるこ  
ともあれば、半年ぶりということもあるが、今  
までに46回開催された。第46回定例研究会は  
2008年7月8日開催であった。毎回の参加人数  
は10数人というところである。

この研究会で面白いのは使用言語が、日本語  
だったり、北京語だったり、報告毎に決まっ  
ていることである。最近の例を挙げると、

第43回 2007年11月17日

李衣雲（政治大学） 台湾における「哈  
日現象」の展開について、1945-2003（言  
語・北京語）

第44回 2007年12月8日

松本充豊（長崎外国語大学） 台湾の民主  
化と戦略的ポピュリズム（言語・日本語）

第45回 2008年3月15日

安達信裕（広島大学大学院） 植民地期台  
湾の公学校における台湾語の利用につ  
いて（言語・日本語）

第46回 2008年7月8日

陳萱（中央研究院台湾史研究所博士後研究）  
「台湾事件をめぐる言説空間——「爾乃  
少女」の描写にあらわれた日本国威発揚」  
（言語・日本語）

という具合で、日本人が報告する場合は日本語  
を使用し、台湾人が報告する場合は北京語を使  
用することが多いが、第46回のようにそうでな  
い場合もある。もちろん使用言語として定めら  
れた言語しか使えないわけではなく、臨機応変  
に言語が使い分けられる。

ここの定例研究会は参加記を毎回作成して  
HPに掲載している。例えば、第46回の市川

生氏による参加記 (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jats/taipeikenkyukai-3.htm#no46>) は、

陳報告の主旨は、「台湾事件」(いわゆる、1874年の牡丹社事件)について、新聞などのメディアや戦記物などの言説を分析することで、当時の日本がどのような台湾理解を形成しつつあったのかを検討するというものであった。報告者が分析した史料は、日本で発行されていた新聞、「台湾事件」を題材とした実録作品、それらに合わせて描かれた新聞錦絵などである。結論としては、台湾は原住民による食人習慣がある地域として、きわめて野蛮なイメージが定着しつつあり、日本が「文明的な教化の対象として台湾をとらえるようになったことが指摘された。なかでも、原住民の少女(「爾乃少女」)に日本式の教育を施し、それが美拳として逐一新聞に報道されたことは、この事件を通して、日本が「国威発揚」の方法を獲得したとする。

として報告概要を記し、討論の内容を紹介した後、

私はこれまで、日本で日本を対象とした歴史研究にたずさわってきた。今回の研究会に参加したことで、改めて、研究発表や論文執筆にどの言語を使用するかが、常に、誰に向かって発信しているのかを問うているのだと実感せざるをえなかった。報告が日本語で行われたため、議論に加わることが容易であったことは事実であるが、報告および議論をうかがっての印象は、明らかに外国研究としてのそれであった。外国研究としての日本史研究の可能性をどのように考えるかは、明治以後の日本の展開を考えれば、きわめて重要な作業のはずである。本研究会は、そのような

ことを一考する契機となった。

との感想で結んでいる。この市川氏の感想からも台湾(史)の学際性、そして日本研究や中国研究などへ向かって新たな着想を発信する可能性がうかがえる。

### Ⅲ 学会報

学会が果たす役割として重要なものとして、学会報の刊行がある。投稿論文にきちんとした査読を行って論文の質を保証したうえで刊行することは、論文を重視しかつ就職が容易でない分野の研究者が多く所属する学会にとって不可欠であろう。日本台湾学会も、年1回5月に学会報を刊行している。こちらも2008年に第10号を刊行することができた。同号の目次は以下である。

#### 論説

「愛郷心」と「愛国心」の交錯——1930年代前半台湾における郷土教育運動をめぐって 許佩賢(1)

1950年代初期台湾の中国化——「改造」と「中央化」の影響を中心に 菅野敦志(17)

1950年代台湾における「失学民衆」への「国語」補習教育——元「日本人」の「中国化」の挫折 森田健嗣(39)

アメリカの許容下での「大陸反攻」の追求——国府の雲南省反攻拠点化計画の構想と挫折 石川誠人(55)

ローバー号事件の解決過程について 羽根次郎(75)

李登輝総統の大陸政策決定過程——「戒急用忍」を事例として 黄偉修(97)

懸賞当選作としての「パパイヤのある街」—  
—『改造』懸賞創作と植民地〈文壇〉  
和泉司 (119)

王白淵の東京留学について 唐穎芸 (141)  
翁鬧を読み直す——「鬚爺さん」の語りの実  
験をめぐる 黄毓婷 (159)

講演

現代台湾における族群概念の含意と起源  
王甫昌 (176) (翻訳 田上智宜)

この学会報の特色は、論説(論文)投稿者に  
大学院生(または院修了直後)が多いことと、  
台湾人の投稿が多いことであろうか。第10号を  
みても許と菅野の両氏を除けば、投稿時は大学  
院生の人々であった。台湾人の投稿も多い。分  
野は、文学、政治、教育、歴史にまたがってい  
る。各論説の概要を紹介しよう。

『『愛郷心』と『愛国心』の交錯』は、1930  
年代の台湾における郷土教育運動を題材に、植  
民地政府がいかなる論理とメカニズムで郷土教  
育のジレンマを超え、「愛郷心」を「愛国心」  
へと格上げさせたのか、そして現場教師たちが  
いかにそれぞれの立場で自分の郷土教育の理念  
を実践したのかを考察したものである。

「1950年代初期台湾の中国化」は、1950年代  
の反共文化政策期における台湾の中国化にとっ  
て、教育・文化面での「改造」と国民党の台湾  
移転による「中央化」が及ぼした影響を検討し  
たものである。

「1950年代台湾における『失学民衆』への『国  
語』補習教育」は、戦後台湾で如何にして元「日  
本人」の台湾人を「中国人」へ変容させる国民  
統合が進められていったのかを、非学齢期の者  
を対象とした「国語」(中国語)補習教育を通

じて検討したものである。

「アメリカの許容下での『大陸反攻』の追求」  
は、1960年代初頭の国府(中華民国)の雲南省  
反攻拠点化計画の立案から挫折に至る過程を考  
察することで、国府の「大陸反攻」の目標をめ  
ぐり顕在化した米華関係の特質を解明したもの  
である。

「ローバー号事件の解決過程について」  
は、1867年台湾の恒春半島南端で発生したロー  
バー号事件につき、事件の解決過程について、  
人類学的研究成果を踏まえつつ、現地社会の動  
向との関係を中心に検討を加えたものである。  
また、清朝当局の消極的対応に痺れを切らした  
ルジャンドルが単身現地に乗り込んで事態を打  
開したという通説に対しての再検討を提起して  
いる。

「李登輝総統の大陸政策決定過程」は、李登  
輝時代の台湾で対大陸投資を規制していた「戒  
急用忍」政策の決定パターンを明らかにするこ  
とを目的とする。

「懸賞当選作としての『パパイヤのある街』」  
は、「パパイヤのある街」当選時における『改  
造』懸賞創作の日本帝国内での位置づけを確認  
し、「パパイヤのある街」のテキスト分析を通  
して、なぜ第9回の当選作が「パパイヤのある  
街」だったのか、どのような基準で選ばれ、ど  
のように読まれたのかを分析し、「パパイヤの  
ある街」が『改造』の編集戦略と、投稿者龍瑛  
宗の投稿上の「傾向と対策」とがかみ合った上  
で選ばれたものであるという結論を得たもので  
ある。そして、そのような戦略的なテキストで  
あるが故に、龍瑛宗の作家としてのその後が、  
「パパイヤのある街」の評価に縛られ続けてし  
まったのではないかという判断から、今後の龍

瑛宗と〈台湾文壇〉研究の指針を得たものでもある。

「王白淵の東京留学について」は、王白淵が1945年11月から4回にわたって『政経報』に連載した「我的回憶録」を中心に、『蕨の道』における謝春木の序文と王白淵の論文を参考にしながら、その東京留学について考察し、東京時代の王白淵における思想と生活上の変化を解明する試みである。

「翁闢を読み直す」は、1940年（推測）に30歳代前半の若さで夭折するまで重要な作品を次々と発表し、奇才として台湾文壇を賑わせた翁闢について、「モダン作家」、あるいは「農民作家」という従来の評価からは抜け落ちていた、翁闢の日本語作家としての諸相を提示したものである。

「現代台湾における族群概念の含意と起源」は、2007年6月の第9回学術大会における、王甫昌氏（中央研究院社会学研究所副研究員）講演の日本語訳原稿（講演自体は中国語）である。

特色および分野が多様であることは、編集する側にとっては大変である。まず、査読者探しが一苦勞である。匿名査読者2名以上を確保しなければならない。同じ分野の投稿が重なったり、主流とは言えない分野だと日本国内の会員だけでは査読者がみつからない。台湾在住の会員に依頼したり、会員に台湾固有の問題について査読してもらい、会員外の研究者（台湾に詳しいとは限らない）にその研究分野固有の問題について査読してもらうこともある。また大学院生の投稿を担当する査読者だと、単に採用不採用を決めるだけでなくどのように直せば改善できるのかを、日本語の非母語話者を担当する査読者だと（本来は事前に投稿者の責任でネイテ

ィブチェックを済ませておくべきことではあるのだが）どのように表現するのが日本語論文として望ましいのかを、大学院の指導教員並みに意見表明して、あるいは投稿に加筆してもらっている。

査読を通過しても、分野毎に異なる書式の扱いをどう揃えるかが悩みである。今のところ原稿募集要項では最低限の書式のみを定め、それ以上は各報告の書式をみながら最大公約数に揃えているのが現状である。

2008年度になってからの話題として、誌面のPDF掲載がある。従来から全号の目次をHPに掲載していたが、このたび、創刊号から第7号までのPDFもHPに掲載した。第6号までは誌面をスキャンした画像PDFとして、第7号は印刷版下として作成したPDFファイルとして、特段の事情があるもの以外全てを掲載できた。第8号以降も、刊行から相当の日数が経たものから順次公開予定である。無料（通信費別途）でダウンロード可能なので、どしどし利用して欲しい。

#### IV ニュースレター

学会報が公的・対外的な意味で学会を代表する刊行物であるのに対し、NLは学会の私的な刊行物だと言える。日本台湾学会は、NLの文章をHPに全文掲載する方針もあって、入退会など個人情報に類することは掲載していないが、巻頭特集記事とともに、他研究会の動向や学会の活動彙報を掲載している。

2008年度は14号を「台湾大統領選挙見聞記」を特集として5月に発行した。内容は<http://www.soc.nii.ac.jp/jats/newsletters/newsno14>.



htmに全文掲載されている。詳しくはHPを参照願いたい、あらためて示すと特集記事が

松本充豊（長崎外国語大学） 2008年総統  
選挙を終えて

松田康博（東京大学） 2008年台湾総統選  
挙雑感

上水流久彦（県立広島大学） 総統選挙を  
めぐる人びと

である。そして台湾研究関連情報という題で、  
会員が得た科研費はどのようなものがあるかを  
紹介してもらう企画があり、

栗原純（東京女子大学） 台湾史研究にお  
ける口述歴史の可能性について

西村一之（日本女子大学） 台湾における  
日本認識と中華認識について

の2つが紹介されている。また、学会・シンポ  
ジウム等参加記として

松崎寛子（東京大学大学院） 2007年台日  
学術交流国際会議参加記

佐藤幸人（アジア経済研究所） アジア経

済の回顧と展望——劉進慶・涂照彦教授記  
念シンポジウム——

が掲載されている。

15号は「小島朋之先生追悼」と「設立10周年  
記念学術大会」の2つを特集して、9月現在校  
正中である。上述の第10回研究大会部分の執筆  
においても、大会特集の各記事を参考にしてい  
る。この場を借りて各執筆者に謝意を表したい。

### おわりに

日本台湾学会は、そして日本における台湾研  
究はこれから何処へ行くのであろうか。第10回  
大会1日目のパネルディスカッションで松田康  
博（東京大学）が指摘したように、日本の研究  
者は、細かな実証研究だけでは情報面で圧倒的  
な優位に立つ台湾の研究者に伍すことは困難で  
あり、学際性を強め、台湾に拘りながらも領域  
を越えてクリエイティブな研究を行うことが必  
要であろう。

（名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授）